

“むくげの会 韓国合宿2015 in 群山”

カンギヨン クンサン イクサン
江景・群山・益山を歩く

— 錦江 (白江・白村江) と益山 (枳慕蜜) —

寺 岡 洋

むくげの会では遙か昔から新春に合宿を行い、一年の抱負を述べるのを恒例にしていた。しかし、毎年同じ抱負を聞くのにも飽き、また、加齢とともに暖かい時期を好むようになり、「新年度」合宿に衣替えしている。今年は韓国・錦江河口の群山 (全羅北道)、伽耶パークモーテルに集合・解散となった。今号の『むくげ通信』は合宿記事がメインであり、驥尾 (きび) に付し連載の舞台を播磨から「百濟」に移したい。

足立さんにはソウルの宿を始め、フィールドワークの下見、さまざまな資料でお世話になり、より充実した合宿になりました。ありがとうございました。

4月16日(木) 晴 関空：出国客で混雑 ソウルは晴時々小雨、寒し。チェジュ航空 21,230円。機内で水が一杯出た。換算レート：0.851 円安。

4月17日(金) 快晴 江景・群山

江景・群山が位置する錦江下流～河口は「白村江」の最有力比定地であり、錦江の景観を眺めるのを愉しみに鉄道の旅に出発。ソウル龍山駅 07:15 → 江景 10:01 ムグンファ号 14,200won 在来線はトンネルが極めて少ないので特徴だろうか。

江景駅で荷物を預かってもらい、まず玉女峯へ。眼下に論山川と錦江の合流点を見下せる。川幅は淀川くらいであろうか？高い堤防が見えないので感じがまるで異なるが。

1860年に刻まれたという「解潮文（満潮・干潮時の水位を記す）」があるとハンギョレ新聞 (2010.2.17)

にあったが、探さず。江景が水運の拠点であったことを窺わせる記事だ。朝鮮時代の烽火台が復原されている。絵図（上図）が描かれた年代を探せなかったが、江景・益山は明示され、群山・長項は見当たらぬ。錦江の河口は海がかなり湾入している。長項邑は1938年に干拓事業で建設された都市で、市街地の90%以上が埋立地だそうだ [李相勳 2010]。

江景では名高いジョッカル定食を断念し、ミルそば（冷麺風だった）で済ませ、やはり錦江沿いの黄山へ歩いて行く。公園になっており、頂上には展望台もある。中腹には黄山書院や儒教の大物が建てた亭子も残る。黄山の丘から眺める錦江は大河の面影が残り、お薦めスポット。



I 白村江はどこ？

合宿の事前学習会で、「白村江（はくそんこう）ってどこなん？」と尋ねられた。これが難物で、以下のとく話が錯綜するがご辛抱を。

白村江という地名は、『日本書紀』にのみ記されており『三国史記』『新旧唐書（とうじょ）』等には登場しない。日

本・韓国では錦江下流～河口に比定する説が多数を占める（錦江＝白村江説）。上図は [吉井2013]。

では錦江を古代にはどう呼称したか？さらに話をややこしくしているのが、百濟滅亡後に百濟復興軍が拠点にした「周留城（中国史料による名称）」の位置比定と白村江がからむ。周留城の位置を錦江下流域とする説と、東津江（トンシンガン 全羅北道）流域説がある。周留城＝東津江流域説をとると、当然、東津江＝白村江になる。

日本・韓国に多くの論文があるが、徐程錫（公州大百濟研究所所長）氏、向井一雄（古代山城研究会代表）さんの論考によります。向井さんには資料の提供を受け、最新の研究状況を教えてもらいました。

錦江はなんと呼ばれたか？

錦江の名称については史料により表記が異なるが、百濟は錦江を「白江」と呼んでいた。

① 武寧王元（501）年、王は加林城に拠り叛いた佐平（さへい 百濟最高位の官位）・白加（草冠に白）を斬り、白江に投げ込んだという記事がある。加林城は聖興山城（扶餘郡林川面）に比定されており、聖興山城付近を流れる川は錦江のみ（左図に林川）。

聖興山城（百濟加林郡管内）は錦江北岸の山城では最も規模が大きく（周長1200m）、発掘調査により百濟時代の瓦片が多く出土している。

② 義慈王20年（660）、唐・蘇定方の率いる水軍をどこで防ぐかという軍議に「白江（或云、伎伐浦）」とあり、白江を伎伐浦（ギボルボ）とも呼んでいる。（百濟軍は白江＝伎伐浦での戦闘に破れ）、唐軍は「潮水に乗り船艦を連ねて進み……」とある。王都（泗沘・



扶餘) へ続く川はいうまでもなく錦江。また、「泗沘河」とも呼ばれている。唐軍と金庾信率いる新羅軍が落ち合ったのは江景周辺ではないかとも?

唐の史料は、ほとんどが「熊津江」で、白村江海戦のみ「白江之口」(『旧唐書劉仁軌伝』)と記される。唐は百濟滅亡後に熊津都督府を置いて百濟旧領の支配を図っており、地名と川の名称がセットになる。

新羅史料は「伎伐浦」と記され、百濟と共通する。百濟滅亡後、羅唐戦争時に新羅と唐の海戦(676年11月)が「所夫里州伎伐浦」行われており、唐水軍が敗れている。所夫里(ソフリ)州は新羅が旧百濟領域に置いた州で、錦江流域を管轄する。所夫里は泗沘と同音異訳とされ、現代ならばソウルになる。

『日本書紀』では、「大唐の軍將、戦船一百七十艘を率て、白村江に陣烈れり」とあり、「劉仁軌伝」の白江之口と白村江は同一地点を指すであろう。

こう書けば、錦江下流～河口が白江・白村江の比定地に決まりのように思えるが、一筋縄ではいかない。

II 周留城・州柔城(つぬさし)はどこ?

史料では復興軍の拠点である周留城が白江の近くに立地するように読むことができ、錦江の北岸に周留城を比定する説が有力である

[津田1913]。

ところが近年、韓国で古代山城の調査が進み、かつて周留城の有力候補であった乾芝山城(韓山)が高麗時代以降の山城である可能性が高いとされた。乾芝山城については『むくげ通信』で紹介している[寺岡2001]。

また、発掘調査により百濟時代の山城であることが確認された南山城(舒川)は小規模すぎる。錦江流域には加林城(林川)以外に復興軍が王城にできるような百濟山城が存在しない。それに、錦江下流に復興軍の拠点があれば、唐軍が駐留する泗沘城への兵站線が遮断され唐軍は孤立するであろう[上図 九州歴史資料館1998]。

周留城が錦江流域でないとすればどこか? ここで東津江流域(全羅北道古阜周辺)が有力対抗馬に浮上する。あと2ヶ所ばかり泡沫候補地がある。

周留城・州柔城もまた名称がいろいろ記される。中国史料(『新旧唐書』・『資治通鑑(しじがん)』)では「周

留城」のみ。新羅史料では、「豆率城、豆良尹(伊)城」、『日本書紀』では、州柔、疏留城(そるさし)など。

話がこみいるが、新羅は武烈王8年(661)、単独で豆良尹城を攻撃したが落せず、1ヶ月余りで包囲を解いている。この豆良尹城について、新羅文武王が唐の薛仁貴に送った書簡(答書)には周留城と記している。そして豆良尹城は東津江流域の古阜・井邑に存在したと推定されている。

古阜には古沙夫里城(旧名称・古阜旧邑城)という山城が発掘調査され、百濟時代の遺物が多く出土しており、この地域における百濟の拠点的な山城・中方城(ちゅうほうじょう)と考えられている。

百濟は滅亡時、五方(ごほう)・三七郡・二百城というよく整った地方統治組織をもっていた。地域を中・東・西・南・北の「五方」に分け(日本でいえば山陽道・東海道などの「道」がいくらか似る)、軍事・政治の拠点になる方城を置いていた。

王都が占領されても方城が健在であれば組織的に抵抗・復興運動を担える。周留城=中方城(古阜・古沙夫里城)という説が有力である。この説によれば、『日本書紀』の州柔城から辟城(へさし 金堤)への転進も理解しやすい。古阜の北が金堤で、金堤は碧骨池(堤)に由来し、「書紀」の地形描写もよく一致する。

復興運動のもう一つの拠点、黒齒常之(こくしじょうし)が拠った任存城(礼山)は西方城と考えられている。任存城(鶴城山城)は城周1,150m。

倭国水軍はなぜ白村江(錦江)へ?

白村江(白江)が錦江河口であり、州柔城(周留城)が古阜(東津江流域 左図の扶安の南)であれば、倭国水軍はなぜ州柔城の救援に向かわず、素通りして白村江へ出かけたのか、という新たな難問が生まれる。天野氏や向井さんは仮説を立てられており、文章化された時点で紹介したい。



III 枢慕蜜(益山)

4月19日(日) 曇雨
新装なった益山駅のコインロッカー、扉を閉めるのに四苦八苦。鍵ではなく指紋で開閉するのもともかく、扉を開けたままで所定の手続きをすませ、最後に扉を閉めるとは思いもよらなかった。

益山・弥勒寺



[上図 金馬周辺地形と遺跡]

益山駅前から市内バスで弥勒寺前まで。広大な寺域が公園化されている。新築東塔を見るのは初めて。まず、遺物展示館へ。図録の販売なし。西塔址はまだ巨

大な覆屋に覆われており、基壇がそのまま残っている。復原工事が難航しているようである。

益山弥勒寺
といえば、韓
流ドラマ愛好
諸氏には馴染
みの「薯童（ソ
ドン）・善花（ソ
ンファ）」のロマンスの舞台。『三国遺事』には、薯を売
って生計を立てていたので薯童と呼ばれた若き日の百濟武王と新羅真平王の王女・善花が薯童の策略で結ばれる有名な、そうとう荒唐無稽な説話が収められている。しかし、「弥勒三会（さんえ）にちなんで殿塔廊廻（でんとうろうふ）それぞれ三ヶ所つくり、寺額を弥勒寺とした」とも記す

[上図 弥勒寺復元図]。1974年以来始まった発掘調査により、弥勒寺は塔と金堂をセットにして3セット配置し、その背後に講堂を一つ置いた類例のない伽藍配置が確認されたことから、『三国遺事』説話の薯童・善花ロマンスもあるいは事実を含むかもしれない、と見直されることになったようだ。中央の塔は木塔、東西は石塔。

2009年、西塔の解体修理の過程で第一層心柱（しんばしら）の上面に開けられた舍利孔（しゃりこう）の中から、舍利具、金製舍利奉安記、約500点にも及ぶ供養具がみつかった



[右図]。金板（横15.5cm×縦10.5cm）の「舍利奉安記」には願文193字が刻まれている。「百濟王后である佐平・沙宅積徳の娘が淨財を喜捨して伽藍を造立し、己亥年（639）に舍利を納め完工した」。

「竊以法王出世……我百濟王后 佐平沙毛積徳女…
…謹捨淨財造立伽藍 以己亥年正月廿九日 奉迎舍利」

これで薯童と善花のラブロマンスは霧散したのであるが、その解釈をめぐっては今も議論が続いている。最近、考古記事の目立つ「東亞日報」は、今年4月に「善花公主は武王（陵）の脇に葬られた？」というA4判より大きな記事を掲載している。

639年は、武王40年で武王の最晩年。倭国は舒明11年、舒明大王は正月を有馬の湯（神戸市）で過ごし、秋、百濟川河畔に「百濟大寺（平城京・大安寺の前身）」を作り始めている。

「竊以（ひそかにおもう）……」

「舍利奉安記」の冒頭句（発語）と同じ「竊以……」が河内の「家原里知識経（ちしききょう）願文」で使われている。この「知識経（多くの人が費用を出し合って行う写経）」を主導したのは百濟系の田辺史（たなべ

のふひと）の一族ではないか、と『むくげ通信』に書いたことがある[寺岡2009]。「知識」というそれまでなかった発想・行為も日本に移住した百濟系知識人が広めたものと考えられる。

「觀世音應驗記（かんせおんおうげんき）」

金馬まで市内バスで戻り、タクシーで帝釋寺・王宮里遺跡を周り、益山に戻った。3万won。

帝釋寺は京都・青蓮院の経蔵に保管される「觀世音應驗記（重文）に登場する。巻末に7世紀中頃に追補されたとされる百濟の觀音靈驗譚二条がある。

「百濟の武広王が、都を枳慕蜜（きぼみつ）の地に遷し、新たに精舎を営んだ。貞觀十三年歲次己亥（639）…（落雷）遂に帝釋精舎を焼いた」

武広王は武王（在位600～641年）、帝釋精舎は帝釋寺と考えられており、であれば枳慕蜜は益山・金馬になる。扶餘が都として放棄されていないので、一時的な遷都か、副都的な位置づけになる。聖武天皇施政下の平城京と難波宮の関係に似る。

帝釋寺址

塔心礎が残り、「帝釋寺」銘瓦片も出土しており、寺址ははやく知られていた。



「佛堂・七級浮図

（ふと）ないし廊房が落雷によりみな焼失した」と記されるが、最近の発掘調査により、塔・金堂・講堂・付属建物などが確認された。廃棄土坑から多くの塑像片、瓦、建築部材などが出土している。寺域は、東西回廊間の距離が約100m、中門から講堂までが140m、百濟寺院では弥勒寺に次いで規模が大きい。

帝釋寺出土の軒平瓦（上図）については前号（269号）で紀伊・上野廃寺に関連し、新羅の瓦として紹介している[寺岡2015]。遺構は基壇が整備されており、芝生はまだ根づいてなかった。

王宮里遺跡

帝釋寺址から約2km西に位置する。南北に延びる低丘陵全体が遺跡公園に整備中で、展示館が付設される。南北約490m、東西約240mの長方形にめぐらされた城壁内に、百濟時代の複数の大型建物が確認されており、「觀世音應驗記」に記される王城の可能性が高いとされる。



[上図 百濟時代城壁]

益山からKTXで龍山駅まで。日曜日で混んでおり、ドアの前の補助席。27,200won。

*引用・参考文献はむくげの会HPをご参照下さい

引用・参考文献

- 津田左右吉 1913 「百濟戦役地理考」『朝鮮歴史地理』
徐程錫・(訳) 天野良晴 2015 「百濟五方城の位置」
『溝瀆』15号 古代山城研究会
忠清南道舒川郡・(財) 忠清埋蔵文化財研究院 1998
『乾芝山城』
李相勲・(訳) 方国花 2010 「白村江戦場の位置と地形について」『いくさの歴史と文字文化』三弥井書店
九州歴史資料館 1998 『太宰府復元』
国立公州博物館 2002 『錦江 最新発掘10年史』
寺岡 洋 1999 「韓国山城踏査メモ」『むくげ通信』173
寺岡 洋 2001 「韓山・乾芝山城について」
『溝瀆』第9・10合併号 古代山城研究会
寺岡 洋 2009 「智識寺・河内六寺と知識集団」
『むくげ通信』233 むくげの会
寺岡 洋 2015 「広渡廃寺軒平瓦の新羅系“包み込み技法”」『むくげ通信』269 むくげの会
赤坂可奈子 2000 「億良の文章論理—竊以を中心として(一)」『懐風藻研究』第6号 日中比較文学研究会
田中俊明 1989 「益山文化と弥勒寺」
『韓国の古代遺跡2 百濟・伽耶篇』中央公論社
国立扶餘博物館 2011 『百濟武王 薩童の夢、弥勒統一』
吉井秀夫 2013 「歴史解説 泗沘時代」
『韓国の歴史』キネマ旬報社
鄭子永 2014 「百濟泗沘期伽藍配置の種類と変遷」
崔文禎 2014 「益山王宮城を通じてみた古代百濟と日本都城の比較研究」
『百濟と日本の寺院と都城』
檀原考古学研究所 公開講演会資料
東亞日報」2015.4.3 付
王宮里遺跡展示館パンフレット
季刊『韓国の考古学』周留城出版社